

禅の友

ZEN
no
Tomo 7
2023





ご本山だより 大本山永平寺【とぶほたるかな】

大本山永平寺
福井県吉田郡

☎〇七七六・六三・三一〇二

盛夏を迎える永平寺。仏殿前の蓮桶には白とピンクの蓮の花が艶やかに咲き、羽化した蝉たちの声が蝉時雨となって山内に響きわたります。額に汗して日々の勤めを行じてゆく中、季節を彩る生命の精一杯の営みが、まるで私たちに生きる力を与えてくれているかのように感じられます。

「山のはの ほのめくよひの 月影
に 光もうすく とぶほたるかな」

『新後拾遺和歌集』にも収められております道元禅師さまのお歌です。煌々と輝く太陽に照らされた世界とはがらりと変わったものではありません。夏の宵闇を飾る螢火も妙なる生命の営みのひとつです。

実は、永平寺に来て生まれて初めて螢を見るという修行僧は少なくありません。私もその一人であり、月のな

い夜空に何とも淡く柔らかく、また高く巡る螢火は本当に幻想的な風景で、思わず修行に來ているということも忘れてしまうほどの美しさでした。ひとつひとつは小さくほのかな光ですが、それぞれが一生懸命に身と心を焦がし、また儂い生命を燃やして飛んでいます。それは誰に言われたのでも教わったのでもありません。そしてひとたび月が現れるとその光もすぐに失われてしまうのです。

諸行無常、私たちが命がけで行っていることもいつかは時の流れと共に消えていってしまうかもしれません。しかし、たとえそうであつたとしても、手を組み足を組んで静かに坐り続けるのみ。道元禅師さまは、ここ永平寺で仏法のためにその身心を捧げていらつしゃるお姿を螢に見て、またご自身を儂い螢火に例えたのかもしれない。



ご本山だより

大本山總持寺【此月の満れば盆の月夜かな】

高浜虚子選

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二一



今年も半年を過ぎ、月日のうつろいの早さを感じます。總持寺では七月に盂蘭盆会を迎えます。太陰曆では月齢で決まるために七月十五日は必ず満月になる日でありました。

そのため「今は満ちていく月が満月になればお盆だ」という季節感を感じさせる句であります。

新型コロナウイルス感染症は未だ終息の兆しはみられないものの、マスクの自由化、五類感染症となり個人の主体的な行動と選択を尊重することになりました。總持寺では引き続き感染力に努める傍ら、参詣者を募り、七月三日から九日まで盂蘭盆施食法要が行われ、感染症で中止していた檀信徒への棚経も今年に新盆を迎える各家の希望を取り、勤めさせていたたくことになりました。

また、併せて境内墓所においての「お盆の墓経」も引き続き行うこととなります。

更に大駐車場を会場に「み霊祭り」も予定しておりますが、詳細は現在検討中です。

この行事は今年で七十六年目を迎えますが、もともと横浜大空襲と鶴見駅鉄道事故の犠牲者を慰霊するために行われたものなのです。近年では東日本大震災や国内外の様々な事故、自然災害による被災者への供養も込められて行われています。

生活が規制され、人と人との触れ合いがしたくてもできなかったこの三年間は私たちに何を学ばせてくれたのでしょうか。

ご先祖に感謝すると共に、今一度自身の立ち位置を確認する好時節なのです。

選・坊城俊樹

どさと置く牧野図鑑や春灯

長野県 森山昌子

評 『牧野図鑑』は植物学者の牧野富太郎の本。日本植物学の父とも呼ばれた。「雑草という草はない」の名言で知られる。このぶ厚い図鑑を春灯の下で開くのは好きな人にとつて至福の時間だろう。それは牧野博士の命に対する温かな心に触れるからでもある。

舌を出すアインシュタイン万愚節

東京都 長谷川 瞳

評 このアインシュタインの写真を見た方は多いだろう。この世界的な天才はその素晴らしいキャラクターでも知られる。いつでもユーモアを欠かさなかった彼はエイプリルフールでどんな嘘をついていたのか。相対性理論はジョークだったとか。

◆ 父母の山より来たる初音かな

山口県 御江恭子

◆ 清明や丸き地球の水を汲み

埼玉県 新藤共子

◆ 只管打坐するピノキオや古簾

三重県 西村廣視

◆ 渡し舟出てゆき蝶のむつまじき

千葉県 長澤きよみ

◆ 春雷にブツセの詩集伏せにけり

島根県 藤江 堯

◆ 湯豆腐のゆげと語りし独り膳

熊本県 福島隆子

◆ 風強し我窓に蝶は頼りて

山口県 稲村みどり

◆ 集落を片寄せてみる青田風

大阪府 柏原才子

◆ 春寒や路傍に小さき遊女の碑

三重県 菅沼芙蓉

◆ 西郷の墓石も太し四月尽

長崎県 崎田定雄

選者吟

子は二歳母は二十歳の墓誌の夏

俊樹

作句小見 我が家の墓のある墓地を何気なく歩いていたらこんな墓誌に出逢った。二歳の子と二十歳の母の命日が一緒。ということは事故等で同じくして亡くなったのか。嗚呼。

選・長澤 ちづ

とよあしはらの瑞穂に代はり泡立草我が
世の秋を謳歌してゐる

三重県 西村 廣視

評 豊葦原は豊かに葦の茂る国の意味で日本のこと。

瑞穂は稲穂。休耕田が増え、荒れてゆく田畑を、
外来種の背高泡立ち草が繁茂して黄に覆う光景
を眺め嘆かわしく思う作者。昨今はその泡立ち
草も自然淘汰されススキが増え始めている。

ややこしい話は飯の後にしてザツクザツ
クと切る春キヤベツ

群馬県 松本 さえ子

評 春キヤベツの瑞々しい食感が「ザツクザツク」

のオノマトペからわかる季節感溢れる一首。ま
ずは食事と厨仕事の大切さを伝え、それは精神
の健やかさへも繋がるものとする。

◆ 鶯を聞きに行くよと妻に言い鉄をかつぎて山畑に來ぬ
鳥取県 徳本 義則

◆ 閑院より百日は過ぐ整形外科の庭の菜の花莢結びたり
兵庫県 前田 あつ子

◆ 雪消えて冬眠終えし田を起こすトラクターの音ツナギの農夫
秋田県 小松 紀子

◆ 寺隅の水鉢に浮く花三、四片なほ薄紅の色を残せり
三重県 藤川 幸子

◆ 久々に我が名を呼ばれ驚きぬノーマスクにて散歩しをれば
宮城県 須藤 智恵子

◆ 山姥のごとき白髪をまず束ねそれから朝の身支度をする
静岡県 杉原 民子

◆ 碎石場発破の粉塵おさまりて青空高く鶯が輪をかく
岩手県 関合 新一

◆ 水張田に夕の日さして水鏡「お疲れさま」とやさしく照らす
岩手県 千葉 喜恵

◆ 立ち寄りし上下の町になごり雪店、店、なべて雑を飾りぬ
三原市 徳永 進一郎

◆ 逃避行いさつく先でぶつかつてころがり戻るこうかいの旅
静岡県 内山 忍

選者詠

雨の打つ朴の木末に目をやりて電話の己が声を
なだめる
ちづ

作歌小見

須藤さんの一首にはコロナ禍以前の人との繋がりが回復
し始めた時代の動きが表現されています。喩えとは言え、夜間は「山
姥」だったのかと思わせる杉原さんのブラックユーモアも余裕ある
詠いぶりです。